

## [特別展によせて]

## 仙 境 へ の 誘 い

## — 狩野山雪筆「盤谷図」をめぐる —

狩野山雪(1590~1651)は、師である狩野山楽(1599~1635)と同様に、京都とその周辺を活躍の場として、襖絵、屏風絵、押絵(貼交屏風)などを専ら制作しました。

慶長、元和、寛永期は、江戸幕府や有力武家により寺社の改修や創建が盛んに行われ、また京の町衆が経済力をつけ豊かな文化生活を営んだ時代であり、建築装飾や室内調度のための絵画の需要が以前にもまして多かったようです。土居次義博士の長年の研究により、妙心寺塔頭の桂春院、天球院、天祥院、京都府八幡市の神応寺、泉之坊、長浜市の大通寺などに今もの障壁画は、一部に山楽との共同制作もありますが、主に山雪が制作したものであります。また山雪の代表作「雪汀水禽図屏風」は、京の町衆の家に伝わったものといわれています。

また、山楽・山雪の京狩野家の子孫に伝わる「山楽・山雪山水帖」は、障屏画の下絵と縮図48図(そのうち一図は山楽の下絵、外は山雪のもの)を集めたものですが、なかには実物が遺る「龍虎図屏風」の下絵、文献に記録されている禁中御進物の「富士三保松原図屏風」の下絵、二条家や酒井家依頼の屏風の下絵など貴重な資料が含まれており、この山水帖によって山雪の大画面制作の盛んであった様子がうかがわれます。一方、清水寺の「繫馬図絵馬」(寛永14年)、東福寺の「観音図」(正保4年)、泉涌寺舍利殿の天井画「雲龍図」(正保4年)などの仕事もしており、当時、職業画家として広く活躍していたことがわかります。

さて、山雪の作品や、その丁寧な下絵描きから、彼の生真面目な性格をうかがい知ることができま

す。それだけではありません、わたしたちは山雪の別の面、つまり山雪の教養人としての「自娛」の世界を、彼の画に見ることができま

す。「うまれつき隠淪を好み、俗に接するを悦ばず、ただ心を後素に潜める」(『狩野永納家伝画軸序』)というのは、儒者林鶯峰の山雪についての人物評です。世俗との交際を避けて家にこもり、画の世界に遊ぶことが彼の楽しみでありました。画ばかりでなく、日本の古典や漢籍に親しむことも同様でした。「桃源子」「松柏山人」という別号は、そのような彼の気持を表わしたものでしょう。

ところで「盤谷図」(「美術の窓」挿図)は、山雪の心の裡にある仙境、あるいは桃源郷(ユートピア)を絵画化したものと思われま

す。この作品は、紙本墨画、縦31.5センチ、横122.8センチの一枚の紙に描かれています。画面の右半分は陸の景色、左半分は川の景色であり、現在は掛幅になっていますが、あるいは元は画卷であったとも考えられます。

## 図1 桃源図下絵 狩野山雪筆

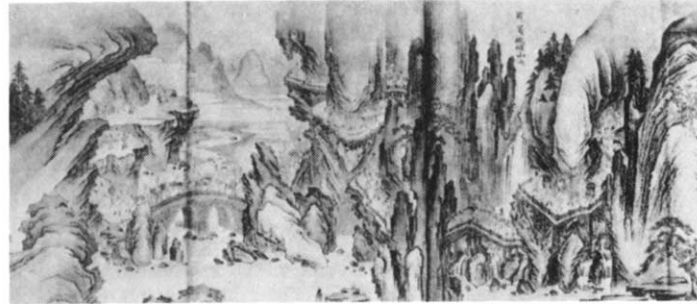


図2 長恨歌図巻(峨嵋山の場面) 狩野山雪筆

の間を環るをいう、故に盤という。或は曰くこれ谷なり、宅幽にして勢阻(険)し、隠者の盤旋する所なり、人あり李愿これに居る」とあります。本図は、その序に画因を得て描いたものと考えられます。

この作品の画面右側の上から、山雪の四つの印章「狩野」「山雪」「蛇足軒」「桃源子」のところから、ひと筋の細い山道が見えはじめ、巖穴を通り、深い谷の崖縁に沿って、隠者が住む奥の楼閣へとつづいています。そして道は谷を廻り、奇峭な山巖を廻り、瀑布の見える少し開けたところにでます。その崖上の松樹の下に二人の高士と侍者の童子が、瀑布の下の幾筋にも分かれた飛泉のさまを覗き込んでいます。そして、その水は、波瀾逆巻く江水に注ぎ込みます。

この画は、岩石波瀾の屈曲旋回する激しい動きのある情景が描かれていますが、その裡にも静謐なところがあります。さまざまの形態の岩石は、堅固な質感、塊量感をもって表わされています。その皴法は細密であり、濃淡の墨の巧妙な運用が加わって暗く凹んだところ、明るく出たところがみごとに描き分けられています。また、景物それぞれの位置関係も手にとるように明瞭に表わされています。高度な水墨画法です。ですから興行を感じさせ、それは、あたかも立体写真を見ているようです。

この盤谷序によせて描いた別の作品に、明時代後期の文人画家・

董其昌(1555~1636)の「盤谷図巻」(大阪市立美術館)があり、天啓2年(1622)以後の作と考えられているものです。この盤谷図巻は、縹渺として展開する山水の大観が表わされ、山雪のそのイメージとは大変異なっています。この盤谷図の主題を山雪がどうして知ったか、興味深いものがあります。

山雪の盤谷図のモチーフは、「山楽・山雪山水帖」にある山雪自筆の下絵「桃源図」(図1)のそれと共通します。すなわち溪谷の奥には楼閣があり、また瀑布や松樹がはえる岩島などもあり、基本的には同じであります。ただし、「桃源図」には、舟の描写があり、この図が赤壁図のモチーフからきていることが想像されます。また、盤谷図のモチーフは、正保3年(1464)の「長恨歌図巻」三巻(三田博物館旧蔵)の「峨嵋山」(図2)の情景とよく似ています。モチーフばかりでなく、その描法も酷似しています。とすると、「盤谷図」は、山雪の晩年、正保3年ごろ、57歳ごろの作と考えられます。

山雪は、中国の古典趣味をとおして、この「盤谷図」を描いているわけですが、描いているうちに、山雪はいつしか彼を包みこみ慰撫してくれる世界の中へ入っていきま

(林 進)

季刊 美のたより No.76

昭和61年 8月28日

発行 大和文華館